

一般

令和4年度入学試験問題

②

国

語

[注意]

- すべて放送の指示に従いなさい。
- 印刷が不鮮明なときは手をあげなさい。
- 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

桜花学園高等学校

一 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

現在、世界のどの都市に出かけても、似たようなビルや集合住宅が立ち並んでいる。パリでもローマでもエジプトでも東京でも北京でもメキシコシティでも変わらない。鉄とガラスとコンクリートで作られた四角な箱に大きなガラスのはまつた建物ばかり。

十九世紀の世界はヨーロッパの歴史主義建築一色に染め上げられたといふのに、二十世紀に入つてのこの変化はいったいどうしたというんだろう。ゴシック・リヴァイヴァルやネオ・バロックなどの手の込んだスタイルで飾られた建物はどこに消えてしまったんだろう。どうして作られなくなってしまったのか。

①その謎について考えてみたい。

歴史主義から離れる動きが、どういう順で進行していったのか、理由は諸説あるにしても、その具体的な過程ははつきりしている。

十九世紀の末に新しい動きが起こった。アール・ヌーヴォーのデザインである。歴史主義は、やれイオニア式の柱飾りとか、ゴシックの尖頭アーチとか、ローマ風の三角破風とか、こここまかに分節されて定形化したルールに従い、その枠内で個別なデザインがなされていたが、アール・ヌーヴォーはこの枠を破り、分節化をやめ、壁面を一つの伸びやかな面として扱い、そこに取りつく装飾もデザイナーの筆の勢いにまかせた。その結果、壁面は、平坦な面に加えて自由にカーブする例も現れ、装飾は、うねるような曲線やからみあう自由な線が前面に踊り出た。アール・ヌーヴォーの強い装飾性は、それまでの歴史主義と似て見えるが、装飾の背後の面と立体の扱いに ② があつた。

装飾のテーマには方向性があり、百合のよくな花や繁茂する蔓草や、時には女性の姿が取り込まれ、官能的な印象を与えるにおかない。花や

蔓や女だけにとどまらず、代表作として知られるウイーンのセセツショソ館には、オリーブと女に加え、女の頭部には蛇がからみ、脇からはトカゲがうかがい、下には亀がはう。バルセロナのガウディのサグラダファミリア教会の壁面には、大トカゲとワニがはい、正面中央の柱は玉をくわえた蛇体の上から、左右の柱は大亀の甲の上から、立ち上がってい。蛇、トカゲ、亀、ワニ。歴史主義には先例のない奇妙な装飾動物にちがいない。それも官能的な花や蔓草と組になつて。

十九世紀の末に現われたアール・ヌーヴォーを突破口として、二十世紀に入ると、ヨーロッパ各国でさまざまな新しいデザイン運動がまき起こる。ドイツの表現派、ドイツ工作連盟、イタリアの未来派、ロシアの構成主義、オランダのデ・スタイル、チェコのキュビズムなどなど。日本も影響を受け、分離派（一九二〇、堀口捨己他）やマヴィオ（一九二三、村山知義他）やバラック装飾社（一九二三、今和次郎他）が青年たちによつて結成されている。

アール・ヌーヴォーを皮切りに、ヨーロッパを中心にはアメリカと日本を含め始まつた新しいデザインのさまざまな試みは、およそ三十年して ③ 一つどころへと収束する。

一九一九年に新興の美術学校として開校し、一九三三年にナチスによって閉校されるドイツの、バウハウスである。建築家としては初代校長のワルター・グロピウスと二代校長のハンネス・マイヤー、三代校長のミース・ファン・デル・ローエ、画家としてはワシリー・カンディンスキイ、パウル・クレー、ヨハネス・イッテン、モホリ・ナギ。日本からも四人が学んでいる。

アール・ヌーヴォーにはじまるさまざまな造形的試行錯誤の行きついたバウハウスのデザインとはどのようなものだったのか。

まず、理論としては、二十世紀を科学技術の時代ととらえ、科学技術

にふさわしい建築を求める。具体的には、鉄とガラスとコンクリートの三つを材料として使い、全体の形は合理的で無駄のない四角な箱型とし、そこに大きなガラス窓を開ける。色は白が基本。

歴史的様式や装飾の美を過去のものとして切り捨て、(4)に基づく構成の美を打ち出す。各国各地の歴史と文化につながる歴史主義に代り、世界のどこでも共通の、無国籍にしてインターナショナル（国際的）な建築。それこそが、無国籍にしてインターナショナルな科学技術にふさわしい。

青銅器時代の四大文明にはじまり二千年近くづいた多彩な建築の歩みは、その歴史と文化を完全に否定されて終わった。

ここにくれぐれも注意してほしいが、バウハウスのデザインをヨーロッパとつないで考えてはならない。(5)、元をたどると四歩目の大航海時代のヨーロッパのせいで世界の建築の多様性は半減し、五歩目の産業革命でさらにヨーロッパ一色に染まり、六歩目で白い箱の大きなガラス窓にいたるのだけれど、この六歩目の帰着はそれまでの四歩五歩をリードしたヨーロッパ自身にとつても意外なもので、エジプトはじめまりギリシャ、ローマをへつづいたヨーロッパの建築の歴史を自己否定してしまったのである。バウハウスのデザインの背後にヨーロッパの歴史や文化の陰を見つけることはできない。あるのは(4)という数学。数学に国籍はない。

バウハウスのデザインは、産みの親のヨーロッパにとつても、異質で血のつながりの見つからない(7)のような存在であった。(7)はいくつもの名前を持ち、インテーナショナル・スタイルとか、インテーナショナル建築とか、合理主義建築とか、機能主義建築とか、日本ではモダニズム建築と呼ぶことが多い。アル・スーザーにはじまりバウハウスにいたる建築家たちは、そ

れにしてもどうして二千年近い歴史や文化の伝統から、わずか三十年の間に切れて進むことができたんだろう。三十年間の動きをこまかく追うと、各国各地でいろんな若いグループや個人が、日本などの伝統建築から刺激を得ることを含めて、さまざまな試みをし、そうしたネットワークの動きのなかから、バウハウスへと行きついたことが分かる。科学技術の時代の人間の、建築的総意のたまものといつてかまわない。

三十年間の(8)のなかで、日本の伝統建築が重要な肥やしとなつたことが明らかとなつてている。

モダニズムの平面（間取り）は、それまでのヨーロッパ歴史主義の平面とは大きく変わった。ヨーロッパの建築は石や煉瓦の壁を構造体として発達したことから、部屋と部屋、廊下と部屋、さらに部屋と外の境は厚い壁で仕切られ、個々の空間は分断される。一方、モダニズムが到達した平面は、ミースの一九二九年のバルセロナ・パビリオンによく現われているように、壁をできるだけ少なくし、壁の代りに柱を立て、部屋と部屋の境をとり払つて一体化し、内と外の関係も、壁ではなくてガラスによって視覚的に連続させる。

こうした(9)的で透明性の高い平面の成立に、日本の伝統が役立つた。

一八九三年にシカゴで万国博覧会が開かれた時、日本政府は、全体構成は平等院鳳凰堂を模し、インテリアは、寝殿造り、書院造り、茶室からなる鳳凰殿を出品した。これを見た二十六歳のフランク・ロイド・ライトは、欧米の壁に閉ざされた建築とは別の原理を知り、大きな刺激を受け、以後、日本の伝統建築や浮世絵に関心を持つようになり、一九〇五年（明治三十八）年には初来日して、各地の名建築を歴訪した。その後も、浮世絵のバイヤーとして来日し、世界の建築界で最もよく日本の伝統を知る人となる。

歐米の歴史主義の壁を打ち破りたいと思いながら、具体的にどうしていいか分からなかつたライトは、日本建築に学び、仕切りを少なくして内から外へ向かつて伸びてゆくような間取りと、大きな窓と、水平に伸びる外観の作品を作るようになった。

当時、ライトはシカゴの野心に満ちた、しかし世界的には無名の建築家でしかなかつたが、そうして作った作品の図面集を当時の世界の建築を引つぱつていたドイツで一九一〇年に出版する。この図面集に表現されていた間取りの流動性と外観の伸びやかさに、ライトと同じ問題にぶち当つていたグロビウスやミースは大きなショックを受け、それまでのドイツ表現派から脱出する重要な足掛りをえた。加えてもう一つ、オランダのデ・スタイルのグループの「構成」を足掛りとして、バウハウスの壁の代りに柱を立て、間切りを減らし、大きなガラス窓で視覚を解放する平面が誕生する。第一号は一九二三年のグロビウスのバウハウス校長室。校長室完成直後、日本から分離派の石本喜久治と堀口捨也が訪れ、堀口はヨハネス・イッテンとモホリ・ナギに案内されて校長室を見学し、以後、何人もの日本の青年建築家が留学生としてあるいは見学者として訪れ、バウハウスのデザインは、世界でもまれなほど早く、日本にもたらされる。第一号は石本の三宅やす子邸（一九二七）。

一八九三、鳳凰殿→一九一〇、ライト図面集→一九二三、バウハウス校長室→一九二七、三宅やす子邸。日本の伝統建築の影響は、三十四年かけて地球を一回りし、日本に帰つたのである。

（藤森照信『人類と建築の歴史』より）

（注）
1 ゴシック：西洋芸術や建築の様式の一つで十二～十五世紀にフランスを中心へ発達した。
2 バロック：西洋芸術や建築の様式の一つで十六～十八世紀にヨーロッパで流行した。ネオ・バロックは十九世紀後半のバロックの

様式を踏襲した様式。

セセッション：「分離派」と同義で、十九世紀末、ドイツ・オーストリア各都市に興つた絵画・建築・工芸の革新運動。

ワシリ・カンディンスキイ：ロシア生まれ、主としてドイツで活躍。抽象画の先駆的芸術家。

パウル・クレー：幻想的な作品で知られる芸術家。

青銅器時代：考古学上の時代区分の一つ。石器時代と鉄器時代の間に位置する。

万国博覧会：世界各国がその工業製品・化学機械・美術工芸品を出品展示する国際的な博覧会。一八五一年ロンドンで第一回が開かれた。

平院鳳凰堂：一〇五三年藤原頼通が造立した京都、平院にある阿弥陀堂。

9 フランク・ロイド・ライト：アメリカの建築家、建築の藝術性と実用性を統一したデザインで知られる。代表作に犬山、明治村に残る帝国ホテルがある。

問一

傍線部①「その謎」とありますか、どのようなことですか。最も適當なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

A 現在、世界のどの都市に出かけても、類似するビルや集合住宅が見られること。

I パリでもローマでもエジプトでも東京でも北京でもメキシコシティでも歴史主義のビルや集合住宅が建ち並んでいること。

ウ 十九世紀の世界は、ヨーロッパの歴史主義建築が建ち並び、他の様式の建築を排除したこと。

E ゴシック・リヴァイアルやネオ・バロックなど複雑で手の込んだデザインで飾られることで、建物の建築費の問題が生じたこと。

オ 歴史主義から離れる動きが建築の流行となつたが、その具体的な過程が思いのほか、はつきりしていること。

問二 □②に入る最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 分節されて定形化したルール
イ 統合されて個別化したルール
ウ 歴史主義とは異なる伝統
エ 官能的な方向性に向かう古さ
オ 官能的な方向性に向かう古さ

問三 □③「一つところ」とは何ですか。本文中から五字で抜き出しなさい。

問四 □④に共通して入る語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 哲学 イ 科学 ウ 歴史学
エ 物理学 オ 幾何学

問五 □⑤に入る語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 次に イ だが ウ たしかに
エ 例えば オ なぜなら

問六 傍線部⑥「産業革命でさらにヨーロッパ一色に染まり」とあります

が、同じ内容を述べた箇所を本文中から三十字以内で抜き出し、最初の十字を答えなさい。(句読点や符号などは一字に数えます。)

問七 □⑦に共通して入る語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 甘えっ子 イ 鬼っ子 ウ 蛙の子
エ 捨て子 オ 申し子

問八 □⑧に入る語を本文中から四字で抜き出しなさい。

問九 □⑨に入る語を本文中から二字で抜き出しなさい。

問十 本文に合致するものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア バウハウスのデザインはそれまでのヨーロッパの歴史主義的建築の伝統の上に根付いてはいるが、仕切りが少ない日本の建築や浮世絵などの日本の文化からの影響が大きい。
イ アール・ヌーヴォーの奇妙な装飾は一見、先例が無いように見えるが、エジプトにはじまりギリシャ、ローマをへてつづいたヨーロッパの建築の歴史を完全に受け継いでいる。
ウ バウハウスのデザインは、ヨーロッパを含む各国各地の歴史と文化につながる歴史主義建築ではなく、世界のどこでも共通のインターナショナル(国際的)な建築である。

- エ フランク・ロイド・ライトは、日本の伝統建築や浮世絵に関心を持つようになり、バウハウスのワルター・グロビウスと共に日本風の建築を設計した。
オ バウハウスのデザインは何人の日本の青年建築家が留学生としてあるいは見学者として訪れた石本の三宅やす子邸から始まり、バウハウスの校長室に結実した。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

シユツ、シユツ、シユツ……。

研ぐほどに、昔の感覚が戻つてくるような気がした。

「じゃあ、包丁研ぎはあなたにお任せして、わたしはちょっとコタローの散歩に行つてきいいかしら」

「コタローって、あの白い犬……」

「そう。彼はコタローっていうの。まだ、この時間じや、お客様はこないから、留守番よろしくね」

「あ、はあ……」

悦子さんは、くるりと身を翻すと、さつさと店から出て行つてしまつた。

それにも――。昨夜、泥棒としてこの店に忍び込んだ男に、あつさり留守を任せてしまうとは……。あの人は、どこまで不用心な人なのだろう。いや、どこまで他人を信用するつもりなのだろうか。

元泥棒に本気で心配されている悦子さんことを思つたら、なんだか笑えてきた。私はにやにやしながら、再び包丁を研ぎはじめた。

それからしばらくして、私はキッチンの台の上に、キンキンに研ぎ上げた二本の包丁を並べて置いた。

「よし。出来た……」

一個の細胞をスッパリ半分に切れるくらいの鋭さを、この二本の包丁は身につけていた。ここまで完璧に研げる人間は、プロのなかでもそうはない。

私は、久し振りに、仕事の後の心地よい充実感を味わっていた。出来ることなら、あと数本は研ぎたいくらいだった。包丁を研いでいるとき

の、あの無心になれたような静かな感覚が、たまらなく懐かしかったのだ。包丁と、砥石と、シユツ、シユツ、という摩擦音だけが世界のすべてに感じられる、あの究極の感覚――。

そして、研ぎ上げた刃を確認したときの充実感。

私は、あらためて思った。好きだつたのだ。「研ぎ屋」という仕事が。

そして、自分の腕に、ゆるぎない誇りを抱いてもいたのだ。

ふと思いつつ、私は自分のリュックのなかから自前の出刃包丁を取り出した。専門店で買えば、数万円は下らない一級品だ。当然だが、その刃はすでに完璧以上に研ぎ上げられていた。しかも、濡らした砥石の粉を樹脂につけ、それで刃先の上を丁寧にこすることでツヤを消してあった。これは日本刀の仕上げに使われる「内雲」という特別な技法だ。この包丁は、切れ味はもちろん、見た目の美しさにまでこだわった究極の一本なのだ。もはや私のプライドそのものと言つてもいい。

私は、この包丁を、そつと下から支えるように両手で持つた。

〔可愛がつてもらえよ〕

つぶやくように言つて、他の二本の包丁と一緒にキッチンの棚にそつとしまつた。

④ それから数分で、悦子さんが戻つてきた。キッチンを覗くなり、さつと冗談を飛ばす。

「あら、まだいたの。せつかく逃げるチャンスをあげたのに」

私は朝食に使つた皿洗いをしていたのだ。

〔 ⑤ 〕

私も冗談で返してみた。

悦子さんは愉快そうに笑う。

「で、包丁は?」

「ばっかり研いで、しまっておきました。一本とも」

「ありがとう。助かるわ」

「いえ……」

「あ、そうそう。皿洗いよりも、お願ひしたいことがあるの」

軽い口調で言いながら、悦子さんはキッチンの脇にある古いオーディオのボタンを操作した。

「あ、何でも言つてください」

「じゃあ、お遣いを頼まれてね。はい、これ、お金」

ひょいと茶封筒を差し出された。

「いまから研ぎ屋さんに転職してちょうどいいんですか？」

「泥棒に、お金を預けていいんですか？」

「いまから研ぎ屋さんに転職してちょうどいい」

二人して、悪戯っぽい顔で笑い合う。

そして私が茶封筒を両手で受け取ったとき、どこかで聞いたような音楽が流れ出した。しつとりとした、静かな前奏。

「あつ……」

私は、思わず声を出していた。

悦子さんは、小さく頷いて微笑んだ。

祈る人——『ザ・プレイヤー』だった。

「せつかくプロの研ぎ師が、わざわざ窓から入ってきてくれたんだから、ホームセンターに行つて、いちばんいい砥石をいくつか選んで買ってきもらおうと思つたのよ」

お遣いって、それなのか？

「でも、もう、さつきの二本は研ぎ終わつてますけど……。充分によく切れますよ」

「いいのよ。今後のために買っておきたいだけだから。あなたが選んでくれたら、それがいちばんでしょ」

たしかに、素人が砥石を選ぶよりはずつといい。

「じゃあ、ええと、ホームセンターの場所は？」

岬を向こうに歩いていつて、国道に出たら、右に行つて、トンネルをくぐつて坂道を降りて、ひたすらまっすぐ行けば、右手に見えてくるわ。ちょっと遠いけど、いいかしら？」

「大丈夫です」

「じゃ、お願ひね。くれぐれも、いちばんいい砥石にしてね」

「はい」

私は□□□を返して、店の出口に向かつて歩き出した。その後ろを悦子さんがついてくる。

店を出たところで、私は半身になつて振り返つた。

「じゃ、ちょっと、行つてきます」

右手を上げて、そう告げた。しかし、悦子さんは「気をつけてね」と言いながら、店の外にまで出てきた。

私はテラスの前を横切り、白い犬に手を振つて、てくてく歩いていく。店の外に設置されたスピーカーからも、『ザ・プレイヤー』が流れていた。曲は、まさにいま、男女のヴォーカルの歌声が、一気に盛り上がりしていくところだった。

私は、その美しい祈りの曲を背中で聴きながら、しばらく雑草のなかの轍に沿つて歩いた。

やがて、白い犬が短く吠えた。

なんとなく、気になつて振り返ると、遠いテラスの上から悦子さんが大きく手を振つていた。足元には、あの白い犬がいる。

私も、ちょっとれながら、小さく手を振り返した。

ホームセンターは、予想以上に遠かつた。

海沿いの田舎道を、歩けど、歩けど、それらしき建物は現れなかつたのだ。途中、小さなJRの駅の入口とぶつかる交差点があり、それを越えてからさらに十五分ほど歩き続けて、そこで、ようやく遙か遠くに見えてきたほどだ。男の私の足でも、軽く三十分はかかるただろう。

広々としたホームセンターは、しかし休日のせいか、わりと混雑していた。私はさっそく刃物のコーナーに足を運び、ずらりと棚に陳列された砥石をひとつひとつ丁寧にチェックしていく。そして、目の粗いもの、中くらいのもの、細かいものの三種類を手にして、レジの列にならんだ。いちばん高価な天草産の天然石を使つた粗砥石でも二千円ほどだつたのだが、万一、お金が足りなかつたら困るので、上着のポケットから、あずかつた茶封筒を抜き出した。あらかじめ金額を確かめておこうと思ったのだ。

茶封筒の上から触った感じでは、札が数枚入つてゐるようだつた。千円札なら七、八枚ほどになるか。だとしたら、充分に足りるが……。

私は封筒の中身を引き出した。

と、その刹那、私は「ん？」と声を出していた。

封筒のなかには一万円札と五千円札がそれぞれ一枚と、千円札が七枚、さらに、折り畳まれた便箋が一枚入つていたのだ。

とりあえず、お札はすべて封筒に戻して、私は便箋だけを抜き取つた。三つ折りになつていた便箋を、丁寧に広げる。縦書きの野線に沿つて、海を想わせる藍色の文字が、きれいに並んでいた。

私はその達筆な文字を、一字一句漏らさぬよう、じっくりと目で追つていつた。

包丁、研いでくれてありがとう。

これはその代金のつもりです。

いい砥石を買って、またお仕事をがんばってくださいね。

そして今度は、お客様として、わたしのコーヒーを飲みにいらしてね。そのときは、もつともっと美味しいれるから。

岬カフェ 悅子

よく見れば、封筒のいちばん奥に、岬カフェの名刺も入つていた。九枚のお札は、どれもかなりくたびれていた。私に気づかれないよう、こつそりとレジから抜いた金に違ひなかつた。

私は、あらためて、もう一度、便箋に目を通した。

読んでいるうちに、藍色の文字の列がゆらゆらと揺れ出した。

私の目に、また、しづくがわき出してしまつたのだ。

「ちょっと、ほら、前が空いてますよ」

レジの列の後ろに並んでいた壮年の男性に肩を突つられた。

「す、すみません」

小声で答えて、少し前に詰めた。

やがて、私の順番が回つてきた。

茶色い髪をしたレジ打ちの女の子は、泣いている私を不審な目で見えた。それでも、私は構わず

〔⑨〕

涙を流し続けた。

「この砥石、三つとも……、プレゼント用に……、包んでもらえますか？」

私は、かすれた声でレジの女の子に頼んだ。

「え？ ああ、はい。ええと、それでしたら、お支払い後に、あちらのサービスカウンターでお申し込みください」

女の子は、緊張した面持ちで、入口の脇にあるカウンターを指し示した。

私はうなずいて、ぬぐもりのある五千円札を手渡した。

釣り銭を受け取り、サービスカウンターへと歩き出す。

歩きながら、考えていた。

この砾石は、悦子さんからの「お祝い」のプレゼントだ、と。
新しく生まれ変わった自分に、贈つてくれたのだ。

私は、自らに誓つた。

このプレゼントのリボンをほどいた瞬間から、これから自分の人生と、別れた妻と娘の人生と、そして悦子さんの人生を——心から祈り続けることを。

(森沢明夫『虹の岬の喫茶店』より)

(注) ザ・ブレイヤー・デイビッド・フォスターによつて作曲された曲。「祈り」という日本語曲名を持つ。

問三 傍線部③「可愛がつてもらえよ」とありますが、この表現から読

み取れる「私」の思いを説明したものとして最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大切な包丁を譲ることで、以前の誇りを取り戻させてくれた悦子さんにお礼をしようとしている。

イ 包丁を譲りたいと思える料理人に出会つて、自分は使いこなすことができなかつたと恥じている。

ウ 誇りを持つことを教えてくれた悦子さんに譲ることで、新しく包丁を購入しようと決意している。

エ 高価な包丁を手放すことは惜しいが、悦子さんのために研ぎ上げられた手本を示そうとしている。

オ 以前からこの包丁を欲しがつていた悦子さんが、どれほど喜んでくれるだろうかと想像している。

問一 傍線部①「私」とありますが、冒頭から傍線部①までに登場する人物表現で、「私」を指すものすべてを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「じゃあ、包丁研ぎはあなたにお任せして」の「あなた」

イ 「わたしはちょっとコタローの散歩に」の「わたし」

ウ 「そう。彼はコタローっていうの」の「彼」

エ 「この時間じや、お客さんはこないから」の「お客さん」

オ 「昨夜、泥棒としてこの店に忍び込んだ男」の「男」

問四 傍線部④「それから数分で、悦子さんが戻ってきた」とあります
が、悦子さんが済ませてきたと考えられる用事を次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 犬の散歩

イ 音楽を流す準備

ウ 手紙を書くこと

エ お金を用意すること

オ 地図を手に入れること

問二 傍線部②「切れ味」とありますが、同様の内容を示す二十二字の

語句をこの傍線部②より前の本文中から抜き出し、最初の三字を答えなさい。(句読点や符号などは一字に數えます。)

問五

(5) に入る文を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 許してもらったと安心したら、思わず昼寝をしてしまつて

イ まだ盗めるものがあるかと思つて、探していました

ウ 研いだほうが良い包丁はないかと、物色していました

エ こだわって包丁を研いでいたら、時間がかかつたのです

オ セめて自分の使った皿くらい、洗つてから逃げようと思つて

ウ 研いだほうが良い包丁はないかと、物色していました

問六 傍線部⑥ 「□□□を返して」の□□□に入るひらがな三字を答えなさい。

問七 傍線部⑦ 「しかし、悦子さんは『気をつけてね』と言ひながら、店の外にまで出てきた」とあります、この表現から読み取れる悦子さんの思いを説明したものとして最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この岬カフェで長い間働いてくれた「私」の姿を、自分の目に

焼き付けようとしている。

イ もう二度と会えないかもしれない「私」の幸せを心から祈り、見送ろうとしている。

ウ 選りすぐりの曲を流すことで、「私」が戻つてくれる瞬間を見届けようとしている。

エ 「私」を信じているが、依頼したとおりに行動してくれるかを確認しようとしている。

オ お遣い先までの行き方に不安を抱いていた「私」のことが心配で、見届けようとしている。

問八 傍線部⑧ 「刹那」は、「せつな」と読みますが、語句の意味とし

て最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 永久 えんじゅ

イ 漸次 せんじ

ウ 瞬時 しゅんじ

エ 暫時 ざんじ

オ 恒久 こうきゅう

問九

(9) に入る語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア きれいに

イ まっすぐに

ウ ゆらゆらと

エ ぱつりと

オ ほろほろと

問十

傍線部⑩ 「新しく生まれ変わった自分に、贈つてくれたのだ」と

ありますが、「私」は、どのような自分に生まれ変わることができたと考えていますか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 投げやりな生き方をしていた愚かさに気づいた今、悦子さんの期待に応えて、どのようなことがあつても善惡の判断ができる自分に生まれ変わることができた。

イ まるで家族のように接してくれた悦子さんによつて、離れて暮らす家族と再び暮らし、今度こそは温かい家庭を築こうとする自分に生まれ変わることができた。

ウ なじみのない自分を温かく受け入れてくれた悦子さんによつて誇りを取り戻し、人を思いやることができる自分に生まれ変わることができた。

エ 誇りを思い出させてくれた悦子さんの思いやりを受け入れ、今後は研ぎ屋としての腕を磨いていくという目標をもつ自分に生まれ変わることができた。

オ どんなことがあっても、いつかこうなりたいという夢や希望を心から祈り続けて生きていこうとする自分に生まれ変わることができた。

三 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。なお設問の都合で、本文に変更を加えたところがあります。

六月三日、^(注1)羽黒山に登る。

五日、^(注2)權現^(注3)に詣づ。「羽州黒山」を中略して「羽黒山」といふにや。^(注4)いうのであろうか。

月山・湯殿を合せて三山とす。僧坊、棟を並べ、修驗行法を励まし、靈^(注5)熱心に行い

山靈地の驗効、人、貴び、且つ恐る。繁榮^(注6)とこしなへにして、目出度き御山^(注7)といひつべし。

八日、月山に登る。木綿^(注8)しめ身にひきかけ、宝冠^(注9)に頭を包み、強力^(注10)と案内者

いふものに導かれて、雲霧山氣の中に冰雪を踏んで登ること八里、さら^(注11)に日月行道の雲間に入るかと怪しまれ、息絶え身凍えて、頂上に至れば、天空への閻門

日没して月あらはる。笠を敷き、簾を枕として、臥して明くるを待つ。

日出でて雲消ゆれば、湯殿に下る。

谷のかたはらに鍛冶小屋といふあり。この國の鍛冶、靈水を選びて、

ここに潔斎して劍を打ち、つひに月山と銘を切つて世にしやうせらる。^(注12)

かの龍泉に劍を淬ぐとかや、干将・莫耶の昔を慕ふ。道に堪能の執、浅^(注13)ある有名な龍泉の水を使って劍を造つたという

故事が思い出される執念

からぬこと知られたり。岩に腰掛けてしまし休らふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ば開けるあり。降り積む雪の下に埋もれて、春を忘れぬ

の花の心わりなし。炎天の梅花^(注14)ここにかをるがごとし。行^(注15)

尊僧正の歌のあはれも、ここに思ひ出でて、なほまさりておぼゆ。總じてこの山中の微細、行者の法式として他言することを禁ず。よつて筆を

とどめて記さず。坊に帰れば、阿闍梨^(注16)の求めによりて、三山巡礼の句々、修行者

短冊に書く。

A 涼しさや ほの三日月の 羽黒山

B 雲の峰 いくつ崩れて 月の山

C 語られぬ 湯殿にぬらす 妖かな

D 湯殿山 銭踏む道の 泪かな

曾良

(『おくのほそ道』より)

1 羽黒山：山形県羽黒町にある山。羽黒修驗道の本山。

2 権現：山頂の羽黒権現。今の羽黒神社。

3 月山：出羽三山の最高峰。

4 木綿^(注17)：修行者の登山装束。

5 宝冠^(注18)：刀身を焼いては水に入れて、その鋼質を強靱^(注19)にすること。

6 淬ぐ：刀身を焼いては水に入れて、その鋼質を強靱^(注19)にすること。

7 行尊僧正：平安時代末期の歌僧で天台座主。

問一 傍線部①「六月」とあります。が、月の異名（古い呼び方）を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア かんなづき イ さつき ウ しはす
エ みなづき オ やよひ

問二 傍線部②「いひつべし」を現代仮名遣いに改めなさい。

問三 傍線部③「しやうせらる」とあります。が、「しやう」を漢字に改めたものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 証 イ 賞 ウ 称 エ 生 オ 商

問四 ④に入る語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 早梅 イ 遅桜 ウ 夏桜
エ 夏山 オ 遅梅

問五 傍線部⑤「炎天の梅花」とあります。が、その説明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 暑い夏の中で咲く珍しさ
イ 暑い夏にふさわしい強い香
ウ 暑い夏の中でも咲く生命力
エ 暑い夏に燃えるように咲く姿
オ 暑い夏にふさわしい濃い花の色

問六 A 「涼しさやほの三日月の羽黒山」の俳句の解説文として、

最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雲の中を一気に駆け上がり、ようやく月の出に間に合ったという喜びがある。

イ 霊水のすがすがしさを月光にたとえて詠んだ羽黒山にふさわしい俳句である。

ウ 羽黒山という名に、夕闇の中に浮き出した薄暗い山の姿が連想されておもしろい。

エ 冬ごもりの季節が過ぎた春を想像し、靈山にふさわしいすがすがしさを感じる。
オ 山上の涼を感じた頃、ふと見上げた山の端に三日月を見つけたという喜びがある。

問七 傍線部⑥「雲の峰」とあります。が、この季語が示す季節を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問八 傍線部⑦「語られぬ」とあります。が、その理由を表す一文を古文の中から抜き出し、最初の三字を答えなさい。（句読点や符号などは一字に數えます。）

問九 ある書物は、D「湯殿山 銭踏む道の 泪かな」の俳句に、「こ

の山中の法にて、地へ落ちたるものを見る事あたはず。故に道者の投擲せし金銀は小石のことく、錢は土砂にひとし。人その上を往来す」と注をつけています。その注に従うならば、錢とは、何を指していますか。最も適當なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 祝儀 イ 賽錢 ウ 修繕費
エ 通行料 オ 拝観料

四 傍線部の漢字をひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

1 焦燥の色が濃い。

2 夜空に星が瞬く。

3 新緑にハえる赤い花。

4 人生を冷静にカソシヨウする。

5 ユウシユウの美を飾る。

問十 「おくのほそ道」を含む各作品の成立順の正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 万葉集 → 徒然草 → 古今和歌集 → おくのほそ道
イ 古今和歌集 → 万葉集 → おくのほそ道 → 徒然草
ウ 万葉集 → 古今和歌集 → おくのほそ道 → 徒然草
エ 徒然草 → 万葉集 → 古今和歌集 → おくのほそ道
オ 万葉集 → 古今和歌集 → 徒然草 → おくのほそ道